

## 日本作物学会第 226 回講演会小集会開催報告 「そばにおける作期・作型の新たな動き」

林久喜<sup>1)</sup>・井上健一<sup>2)</sup>・井上直人<sup>3)</sup>・今木正<sup>4)</sup>・大場伸哉<sup>5)</sup>・勝田真澄<sup>6)</sup>・杉本秀樹<sup>7)</sup>・手塚隆久<sup>8)</sup>・  
原貴洋<sup>8)</sup>・藤田かおり<sup>9)</sup>・松浦和哉<sup>10)</sup>・道山弘康<sup>11)</sup>・六笠裕治<sup>12)</sup>・森下敏和<sup>13)</sup>

<sup>1)</sup> 筑波大学大学院生命環境科学研究科, <sup>2)</sup> 福井県丹南農林総合事務所, <sup>3)</sup> 信州大学農学部, <sup>4)</sup> 島根大学名誉教授,

<sup>5)</sup> 岐阜大学農学部, <sup>6)</sup> 農林水産技術会議事務局筑波事務所, <sup>7)</sup> 愛媛大学農学部, <sup>8)</sup> 九州沖縄農業研究センター,

<sup>9)</sup> 食品総合研究所, <sup>10)</sup> 茨城県農業総合センター農業研究所, <sup>11)</sup> 名城大学農学部,

<sup>12)</sup> 北海道農業研究センター, <sup>13)</sup> 農業生物資源研究所)

2008年9月25日, 16:00~18:00に第3会場において標記小集会が開催され, 27名が参加した。

ソバの国内消費仕向量は近年増加の一途で, ソバ需要の増加に伴い国内の作付面積も増加してきている。ソバでは天候による単収の変動幅の大きいことから作付面積の増減だけでは収穫量の見込みがたてづらく, かつ, 収穫直前の天候で収穫量が大きく変動することも少なくない。一方, 日本は需要量の8割を中国, アメリカなどの海外に依存しており, 海外情勢や国内生産量により国産ソバの販売価格が大きく変動し, 安定的な経営が難しい状況にある。このような中で, 産地の中には従来の収量の高位水準化から高品質, 高付加価値による価格上昇をねらった取組みをとる動きが出てきた。また, 需要に対応したソバ生産により, ソバ販売価格の高位安定化をねらった試みも行われるようになってきている。このような事例はここ数年, 日本各地で散見されるようになってきているが, 情報は限られており誰もが知る状態ではなかった。また, これらの試みは, 従来の作物栽培技術では想定されなかった手法で取り組まれているものもあり, 作物学的な技術評価も今後必要になってくると思われる。さらに, これに関連して今までの作物学では使用されていなかった用語も使用されるようになってきた。このような状況から, 作物学会の場を利用して情報を共有し, 議論を進める意味で本小集会を開催することになった。

標記課題については, 豊後高田市役所の西原幹雄氏が「大分県豊後高田市における春まきそばの取組み」, (独)九州沖縄農業研究センターの手塚隆久氏が「新しいソバ作期: 春まき栽培」, (株)橋詰製粉所の橋詰傳三氏が「福井県における高付加価値ソバ生産のための取組み」, 茨城県農業総合センター農業研究所の松浦和哉氏が「茨城県における「常陸秋そば」の作期拡大および早期収穫による高品質化への取組み」を話題提供し, さらに, 島根県農業技術センターの橋本忍氏が「島根県農業技術センターにおけるそば育種の状況」について, 愛媛大学の杉本秀樹氏が「緑肥レンゲを利用したソバ栽培」について話題提供した。

西原氏は平成15年以降本格的に導入されたソバの栽培

状況について, 8月20日~9月15日に播種される秋ソバに対し, 総じて単収が高い春まきソバ(3月20日~4月10日播種)の栽培面積が平成20年に32ha, 全作付面積の25%に達したことなどを報告した。手塚氏は, 実需者から要望の高い3月下旬~4月上旬播種, 6月中旬までに収穫する「春まき栽培」の特徴として, 普通期水稻の前作として栽培が可能であること, 夏のソバ需要期に出荷が可能となり有利な市場形成が可能となること, 秋栽培との組み合わせによる二期作が可能となり, ソバ作期の多様化により機械・施設の有効利用が図れ, 地域の収穫量を高められることなどをあげた。さらに, 春まき栽培用新品種「春のいぶき」の特性の紹介とともに, 今後の春まき栽培品種の育種目標を提示した。橋詰氏は, 8月上旬中旬播種, 10月下旬~11月上旬収穫の基本的作付期間では, 降雹, 降雪などの影響で作柄の影響が大きいことから, 収穫時期を7~10日早めた早刈りにより良質なそば粉が得られる高付加価値栽培が可能となり, 平成20年には県内で60tの生産が計画されていることを報告し, 早刈り栽培における収量, 製粉特性, 品質や収穫作業機の改良について話題提供した。松浦氏は, 常陸秋そばの生産振興, 高品質化の一環として春まき栽培技術体系の確立および早期収穫技術の開発について報告した。橋本氏は島根県在来種および育成系統の特性ならびに島根県のソバ育種の状況を紹介し, 杉本氏はソバの春まき栽培におけるレンゲの播種時期およびすき込み時期の影響について報告した。

ソバでは夏ソバ, 秋ソバの用語があるが, これは品種の生態型および栽培時期の二つの意味で使用されている。今回の小集会ではこれまでにないソバの栽培時期が現場で発生してきており, 既存の用語ではカバーできないことや, 一部では「春そば」の用語も使われていることが話題となり, 討論の結果「春まき栽培」という用語で使用するのが適切であろうという意見の一致を得た。一方, 春まき栽培において中間秋型の品種が使われたり, 通常では考えられない早刈りが実施されているなど, 新たな課題も抽出できた。引き続き機会を作って情報の交換ならびに交流を図っていくことを確認した。